

第廿七吉

野村胡堂

—

「親分、変なことがありますよ」

八五郎のガラツ八が、長んがい顔を糸瓜棚へちまだなの下から覗かせたとき、銭形の平次は縁側の柱にもたれて、粉煙草をせせりながら、赤蜻蛉あかとんぼの行方を眺めておりました。この上もなくのんびりした秋のある日の夕刻です。

「びっくりさせるじゃないか、俺は糸瓜が物を言ったのかと思ったよ」

「冗談でしょう。糸瓜まげが鬚まげを結って、意気あわせな裕あわせを着るものですか」

ガラツ八はその所謂いわゆる意気あわせな裕あわせの衣紋えもんを直して、ちよいと結い立ての鬚節まげに触って見るのでした。

「だから、変なんだよ。糸瓜が鬻を結ったり、意気な袴を着たり——」

「まぜつ返しちやいけません」

平次とガラツ八は、相変らずこんな調子で話を運ぶのでした。

「じゃ、何が変なんだ、そこで申上げな」

「その前に煙草を一服」

「世話の焼ける野郎だ」

平次は煙草盆を押しやります。

「恐ろしい粉だ。埃ほじりだか煙草だか、嗅かいで見なきや解らない」

「贅沢を言うな」

「相変らずですね、親分」

ガラツ八は妙にしんみりしました。江戸開府以来と言われた名御用聞の銭形平次が、その清廉せいれんさの故に、いつまで経ってもこの貧乏から抜け切れないのが、

平次信仰で一パイになつてゐるガラツ八には、不思議で腹立たしくてたまらなかつたのです。

「大きなお世話だ。粉煙草は俺が物好きで呑むんだよ。——それよりもその変な話というのは何なんだ」

「根岸の御隠殿裏ごいんでんうらの市太郎殺しの後日物語があるんで——」

「下手人でも判つたのか」

「あればかりは三輪の親分が一と月越し血眼で捜しているが判りませんよ」

「じゃ、何が変なんだ」

「親分に言われて、この間から気をつけていると、あの家の下女——お菊といふ十八九の可愛らしい娘が、毎日浅草の観音様かんのんさまへお詣りをするじゃありませんか」

「信心に不思議はあるまい。日参をして岡っ引に睨まれた日にや、江戸に怪し

くない人間は幾人もいないことになるぜ」

「それが変なんで」

「娘が綺麗過ぎるんだらう」

「その綺麗過ぎる娘が、観音様にお詣りをするだけなら構わないが、必ず御神籤おみくじを引くのはどうしたわけでしょう」

「毎日か」

「一日も欠かかしません。その上、引いた御神籤を八つに畳んで、仁王門外の糸くめの平内様へいないの格子に結わえる」

「毎日同じことをやるのか」

「あつしがつけてから十日の間、一日も欠かしませんよ。降っても照っても」

「時刻は？」

「巳刻よつ（十時）から午刻ここのつ（十二時）の間で」

「待ちな、元三大師の御神籤おみくじには忌日きにちがあるものだ。日も時も構わず、毎日御神籤を引くのは、いくら小娘でも変じゃないか、八」

「だからあつしが変だと言ったじゃありませんか——糸瓜へちまに髻まげを結わせたり、意気あわせな裕あわせを着せたのは親分の方で——」

「そんなことはどうでも宜い。——その娘は誰かと逢引をする様子はないのか」
「根岸から真まつすぐに来て、真まつすぐに帰りますよ。尤もつとも、ときどき変な野郎が娘の後をつけている様子ですがね、振り向いても見ませんよ」

「変な野郎？」

「若くてちよつと渋皮しぶかわのむけた娘の後をつけるんだから、どうせまともな人間じゃありません」

「お前もそのまともでない人間の一人だろう」

「へッ」

「ところでその娘は、引いたお神籤をていねいに読むのか」

平次の問いは妙なところへ立ち入ります。

「丁寧にもぞんざいにも、見ようともしませんよ」

「フーム」

「そのまま八つに畳んで帯のあいだへ挟んで、御神籤所からだんだんを降りて石畳を踏んで、仁王門におうもんを出て、糸の平内様のお堂の前へ立って、帯のあいだから先刻の御神籤を出して格子に結わえるんで」

「その手順に間違いはないだろうな」

「毎日同じことをやるんだから間違いっこはありません。よほど念入りな願をかけるんでしょうね」

「面白いな八、明日は俺が行って、娘の所作しぐさを見極めよう。そいつは何んか理由がありそうだ」

「へエー、親分が乗出すんですか。——三輪みのわの親分が氣を揉もんで、見境みさかいもなく人を縛りますぜ」

「そんなこともあるまい」

平次は相変らず赤蜻蛉あかとんぼの乱れ飛ぶのを眺めながら、鉄拐仙人てつかいせんじんのように粉煙草の煙を不精ふからしく燻ふかすのでした。女房のお静は、貧しい夕食の仕度に忙しく、乾物ひものを焼く臭いが軒に籠ります。

二

根岸は隠殿裏の武家出らしい母娘の家へ曲者くせものが忍び込んで、用人あがりの中老人、市太郎というのを斬って逃げうせたのは、もう一カ月も前のことでした。

母親の女主人なみのは浪乃なみのと言って、三十五六の少し陰気ではあるが立派な婦人。

娘は十二三で、殺された市太郎老人は五十を越したばかり、そして美しい下女——というよりは、お腰元らしいお菊というのは、十八か九で、こればかりは五月の陽のような明るく美しい娘でした。

引越して来たのは去年の暮、ひっそりとした暮しようで、西国の武家出とばかり、氏も素姓もわかりませんが、近所の評判もよく、店舗も確かで、何んの仔細もなく過しているうち、今からちようど一カ月前、ある夜曲者が忍び込んで、入口の六畳に休んでいる市太郎老人を斬り殺し、奥へ踏込むところを、折よく外から帰って来たお菊の声におどろいて、何んにも盗む隙もなく、そのまま逃げてしまったというのです。

検屍も滞りなくすみましたが、下手人は何んとしても挙がりません。そのとき家の中に居たのは、殺された市太郎の外には、女主人の浪乃と、小さい娘の早苗と二人きり。娘は風邪の気味で早寝をして何んにも知らず、奥にいた浪乃

は怪しい物音に飛んで出ると、市太郎を殺した曲者は、裏口から入って来たお菊の声に驚いて取るものも取らずに逃げうせたのでした。市太郎の傷は前から頸筋を突かれた一と太刀で、お菊が帰ったときはまだ虫の息があり、断末魔^{だんまつまな}乍ら、主人の浪乃を伏し拝むようにしていたということだけは解っております。

表の格子戸は内から乱暴^{らんぼう}に外され、六畳一パイの血の海です。土地の御用聞三輪の万七は、時を移さず乗込みましたが、まるっ切り下手人の見当もつかず、そのまま愚図愚図と一カ月という日を経ちました。そのあいだ係りの同心の勧めで、銭形の平次は呼出されましたが、一応現場を見ただけ、三輪の万七に義理を立てたか、あまり口を出さずに帰ってしまい、その後は三輪の万七にも内証^{しよ}で、子分の八五郎に、そつと見張らせて、情勢の変化を眺めていたのでした。

その八五郎が、美しい下女のお菊の動静を見張っているうち、浅草の日参と、御神籤^{おみくじ}と、糸^{くめ}の平内^{へいない}様の格子^{なぞ}の謎を見付けたのです。

「親分、出かけましようか」

翌る日の朝、まだ飯も済まぬうちに飛んで来たのは、勢い込んだ八五郎でした。

「たいそう早いじゃないか」

「でも根岸から観音様に廻ると、昼近くなりますよ」

「そいつは正直過ぎるだろう、御神籤所を見張っただけでたくさんだよ」

だが、このガラツ八の馬鹿正直さが、平次のために、いろいろのことを発見してくれるのでした。

観音様にたどり着いたのはちようど巳刻よつ(十時)頃、二人は絵馬えまを眺めたり、鳩はとに餌をやったり、ざっと半刻ばかり待っていると――、

「親分、来ましたよ」

ガラツ八はそつと平次の袖を引きました。



©2017 萩 柚月

見るとちようど仁王門を入れて来るのは、平次にも見覚えのあるお菊という可愛らしい下女。鳩にも五重の塔にも眼をくれず、真っすぐに段を登って、大さいせんぼこ賽銭箱の前に立つと、赤い紙入を出して、小銭を摘つまんでポイと投げ、鈴の緒おに心持触れて、双掌もろてを合せたまま、ひた拌みに拌み入るのでした。

「ちよいと、可愛らしいでしょう」

「黙っている」

鼻筋の通った、ふくよかな横顔をガラッ八は指します。

「親分」

「何んだ、うるさいな」

「あれがまともでない人間で——」

振り返ると段の中程のところ立って、不精らしく懐手をしたまま、凝じつと娘の様子を見ているのは、渡り中間ちゅうげんらしい様子をした中年男です。

「なるほど」

「あ、娘は御神籤おみくじを引いていますよ」

「しッ」

下女のお菊は御神籤を引くと、別段それを見るでもなく、八つに畳んで、もう一つ中程から折って帯のあいだへすべり込ませました。

そこから御堂を出て、石畳を渡って仁王門を出るまで、娘の取済ました顔は、一度も四方あたりを見ません。段の中途からそれを見詰めていた人相のよからぬ男も、平凡へいほんな日程をくり返すような静かさで、どこともなく姿を消してしまいました。いや、どうかしたら、物蔭からそつと眼を光らして居るかもわかりませんが、境内にはざつと見渡したところ、怪しい人影もなかったのです。

お菊は糸の平内様の堂の前に立つと、これも事務的な冷静さで、帯のあいだから先刻の御神籤を取出し、堂の格子へ器用な手付でざつと結びました。

「四方あたりを見ようとしてもしない。——おそろしい胆きもの据すわった娘じゃないか」

銭形平次がそう言った時、お菊はもう平内様の堂を離れて、伝法院でんほういんの横の方へ、美しい鳥のように姿を隠すのでした。

そのとき何処どこからともなく現われた先刻さつきの怪しい男、お菊の跡を見え隠れにつけて行く様子ですが、お菊はそれを知っているのか知らないのか、相変あひららず振り向いて見ようとしません。江戸の賑にぎいを集め尽したような浅草あさくさの雑沓ざつさつは、この意味もなく見えるささやかな事件を押し包んで、活きた垣ゑん塙ぼのように、刻々新しい沸たぎりを巻き返すのです。

三

「ここまで見て、お前は引揚げたんだらう」

平次はガラツ八の茫ほつとした顔を顧かえりみました。

「あの娘をつけて見ましたが、御隠殿裏へ真まつすぐに帰るだけで、何んの変哲へんてつもありませんよ。江戸の真まん中ちゆうじゃ、真昼の天道様に照てらされて、どんな送り狼おおかみだつて、業わざはできません」

ガラツ八は長いあごを撫なでるのです。

「何を言うんだ、娘のことじゃない。あれだよ」

「へエ——」

平次は糸の平内様のお堂を指しながら続けました。

「あの格子に、たくさん御神籤おみくじが結むすんであるだろう。縁結えんむすびのまじないにされているんだ。古いの新あたらしいの、勘定し切れないほどあるが、たった一つ変わったのがある筈はずだ」

「？」

「端つこをちよいと紅べにで染めた御神籤だよ——天地紅の御神籤なんか何処のお寺へ行つたつて出るものじゃない」

「へエ——」

「あの娘は観音様の本堂から此処まで来るあいだに、御神籤の端はしを染める暇がなかつた筈だ」

「？」

「だが、あの御神籤は前には無かつたことは確かだ。やはりあの娘が結わえたんだ。——間違いはない。いま引いた御神籤を、読みもせずに平内様の格子に結ぶ筈はないから、やはり帯の間に細工さいくがあつたに違いあるまい。あの赤い御神籤は、家から用意して来たんだらう」

「へエ——。手数のかかる細工ですな」

「それどころじゃない、娘は赤い御神籤おみくじを結ぶとき、前にあの格子こうしに結んであつ

た、青い印しるしのある御神籤を解いて持つて行つたよ。——それに気が付かなかつたのか」

「本当ですか、親分」

ガラツ八は見事に十日間娘に馬鹿にされていたのです。

「赤い印や青い印の付いた御神籤は、何百何千の中でも一と眼に解るよ。俺は先刻ここへ来たとき、確かに見定めて置いたから間違いはない」

「へエ——」

「驚いてばかり居ずに、あの赤い御神籤を解といて来るが宜い。青いのを見なかつたのは手ぬかりだが、なあに、赤いのを見ただけでも、大方の当りはつくだらう」

そう言ううちにもガラツ八は、平内様の堂の格子から、お菊が結び捨てて行つた、赤い印のある御神籤を解いて来ました。

「こいつは楽じゃありませんね、親分。みんながジロジロ顔を見るんだ」

「心配するなよ、泥棒と間違えられっこはない。——男のくせに縁結えんむすびのまじないなどをするのは、どんな野郎だろうと思われただけのことさ」

「なお悪いや」

「おやおや、やはり御神籤おみくじだ——たぶん昨日引いたのへ書き込んで今日持つて来たんだらう。『第廿七吉、禄を望んで重山なるべし、花紅えんむすなり喜悅の顔、か。

——病人は本服すべし、待人来るべし——』そんな事はどうでも宜いとして、見事な筆跡てで書き入れがしてあるよ。『当方無事、あと三日のあいだ、命にかえて頼み入る』と」

「それは何んの事でしょう、親分」

「判らないよ」

「驚いたなア、親分が判らなかつた日にゃ、天道様にだつて判るわけはねエ」

「馬鹿なことを言え。——ところで、もう赤い御神籤を取りに来る刻限こくげんだろう。これを元の通り格子へ結んでおいてくれ」

「へエ」

「いやな顔をするな。——精いっぱい縁結びとりつに取憑かれているような顔をするんだ」

「驚いたなア」

ブウブウ言いながらも、八五郎は赤い御神籤を、元の格子に戻しました。

それからほんの煙草を二三服した頃、

「それ見るが宜い。お前見たいな、縁結びに取憑かれている野郎が来たじゃないか」

平次が指した糸の平内様の格子の前に、威勢の良い男がフラリと立ちました。まだ若そうな着流し、弥造が板について、ほっかぶ頬冠りは少しうっとう鬱陶しそうですが、素

知らぬ顔で格子から赤い御神籤を解く手は、恐ろしく器用です。

「捕まえましょうか、親分」

「馬鹿、御神籤泥棒じゃ引立てばえもあるまい。——黙って後をつけるんだ。落着く先を見極めさえすれば、わけもなく眼鼻がつくよ」

「それじゃ親分」

「抜かるな、八」

「なアに、二本差でなきや、多寡が知れていますよ」

八五郎はヒラリと身をひるがえすと、怪しの男が平内様の堂を離れるのと一緒でした。二人は仲見世の人混みの中を縫って、雷門の方へ泳いで行くのを、平次は何にか覚束ない心持で見送っております。

四

その晩、平次の家へ戻つて来たガラツ八の八五郎は、申分なくさんざんの態度でした。

「あ、驚いた。親分の前だが、あつしはまだ、あんな野郎に出つくわしたことはありませんよ」

自慢の鬚節まげぶしは横町の方に向いて埃ほこりをかぶり、意気な袷はしま目も判らぬほど泥まみに塗れて、全身いたるところに傷だらけ、それがお勝手口からコソコソとでも入ることか、町内に響き渡るような声を張上げて、平次のいわゆる大玄関に、立ちはだかるのです。

「何んという恰好だい、裏へ廻つて泥だけでも落すが宜い——お静、俺の袷あわせを出してやれ、一番野暮やぼなのが宜いよ、身につかないものを着るとろくなことはないから」

口小言をいいながらも、ともかくも男振りだけでも直して、長火鉢の前に据えました。幸い傷は摺り剥きと引つ搔きだけ、生命に別条のあるのは一つもありません。

「驚いたの驚かないのって、こんな眼に逢うと知ったら、親分も一緒に行つて貰うんでしたよ」

ガラツ八の仕方話は始まりました。

赤い御神籤を取った怪しの男をつけて行くと、駒形から、お蔵前を、両国へ出て、本所へ渡つて、深川へ廻つて、永代を渡つて築地へ抜けて、日本橋から神田へ、九段を登つて、牛込へ出て、本郷から湯島へ来ると、日はトツプリ暮れたというのです。

「腹ごしらえはどうした」

平次は訊きました。

「吞まず食わずですよ。塩煮餅しおにもちを買う隙ひまもありやしませんが。恐ろしく足の達者な野郎で、うっかりすると姿を見失います。でも半日歩きつづけて、上野へ来たときは二人ともへトへト、歩いてるんだか、這ってるんだか解りやしません」

「馬鹿だなア」

それが平次の深甚しんじんな同情の言葉でした。

「谷中へ入った時、あんまり癩しやくにさわるからとうとう武者ぶり付きましたよ。このまま続けた日にや、夜の明ける前に参しまって仕舞しう。何糞なにくそで、いきなり御用ごようと来ましたね。——威勢よくやったつもりだが、口惜くしいことに声が出ねえ。半日吞まず食わずじゃ、ろくな唾つばだって出やしませんよ」

「それから何うした」

「二つ三つねじ合あったと思うと、——口惜くしいがこの通り、手もなくやられましたよ。藪やぶの中へ投げ込んで、『あばよ』だってやがる。親分の前だが、口惜くし

いの何んのつて——」

ガラッ八は手放しのまま、ポロポロと涙をこぼすのです。

「馬鹿野郎ッ」

平次の声はりん、としました。

「——」

「何んだって夜っぴて後を跟つけなかつたんだ」

「へエー」

「へエ、じゃないよ。噛かじり付いたら、雷鳴かみなりが鳴つても離さないのが岡っ引のたしなみだ。見ればガン首も手足も無事じゃないか」

「へエ」

「それとも何んか動きのとれない証拠でも押えて来たのか」

「お生あいにく憎様で」

「お生憎様てえ奴があるか、馬鹿だなア」

平次もとうとう吹き出してしまいました。

「もう一度行きますよ、親分。明日は姿を変えて平内様ひらないのお堂の前に頑張がんばって、三日分ばかり兵糧ひょうりょうを背負ってつけたらどんなもので——」

「勝手にするが宜い」

ガラツ八は頭を抱えて飛出しました。その晩のうちに、大阪へ行くほどの仕度を整え、翌る日早々浅草へ乗込んだことは言うまでもありません。

五

その翌る日、ガラツ八は見事に使命を果しました。

「親分、大変ッ」

大變の旋風せんふうが飛込んだのは、戌刻半いつつはん（九時）少し廻った頃。

「さア来たぞ。今晚あたりはその大變が降りそうな空模様だと思つたよ」
平次はそれを期待していたのでしよう。

「昨日と異ちがつて敵さとに覺さられずに見事に後をつけましたぜ。相手が浅草から真まつすぐに巢へ行つたんだから間違まちがいはないでしよう」

「その巢は何処どこだ」

「本所相生町あいおいの裏長屋で」

「それから」

「一日頑張がんばつたが、それっ切り出て来ませんよ。あの風体だから、見落す筈はずは無ないんだが——」

「お前と同じことだ、姿を変えて出たんだろう」

「あつしもそれに気が付いて、いきなり飛込みましたよ。すると、大時代の婆ばあ

アが一人、念仏を称えながら商売物の姫糊ひめのりを拵とえているじゃありませんか」

「それから何うした」

「さんざん脅おどかした末、とうとう口を割りましたよ。あの曲者というのは親分、驚いちゃいけませんよ」

「誰がおどろくものか。——二千五百石の大旗本、駒形にお屋敷を持っています長崎奉行をしていらつしやる、久野将監しやうげん様の家来、先ごろ殺された用人進藤市太郎の伴勝之助という男だろう」

「どうしてそれを親分」

ガラツ八の驚きようは見事でした。

「お前が三十里も歩くあいだ、俺はジツとしている筈はないじゃないか。あのお菊おどかという娘を脅したり、すかしたりこれだけのことを言わせるのに二日かかったよ」

「人が悪いなア、親分」

ガラツ八は少しばかり不服そうです。

「まア怒るな八、何でも判りさえすればよかつたんだ。二人とも判つたんだから、怨みうらっこはあるまい」

「それっ切りですか、親分」

「まだいろいろのことが判つたよ。手っ取早く言うと、主人の久野将監様がお役目で一年前から長崎へ出張、異人いじんとの掛け合いに骨を折っているのに、駒形の留守宅では、叔父の深田琴吾きんごというのが、家来の山家斧三郎おのと腹を合せ、お妾めかけのお新という女を立てて、奥方の浪乃なみの様を、いろいろ難癖をつけて屋敷に居られないように仕向けた。お気の毒なことに奥方の浪乃殿は、お里方が絶家して帰るところもなく良人将監殿が江戸へ帰るまでは、滅多めったに死ぬわけにも行かない。跡取の謙之進けんのしん様——十歳になつたばかりのを屋敷にのこし、十二歳の

お嬢様早苗様さなえというのと、お腰元のお菊、それに用人の市太郎をつれて、根岸の御隠殿裏の貸家に籠った——不義ふぎの汚名おめいを被かせられ、親類一党から義絶された奥方としては、こうするよりほかに工夫はなかった」

平次の話はつづきました。

根岸に籠った奥方は蔭かげながら屋敷にのこした倅謙之進の上を案じ、女の智恵に及ぶ限りの工夫をこらしてそれを守護しました。腰元のお菊と、用人進藤市太郎の倅で、屋敷に踏止まった勝之助が、青と赤の印の付いた御神籤おみくじを交換して、わずかにお互の無事を知らせ合い、いろいろしめし合せて来たのは、行届き過ぎる悪人どもの監視かんしの眼をくぐり、その毒計に対抗して、家と若君との無事を計る苦衷だったのです。

主人将監は長崎のお役目が済んで、いよいよ三日の後には帰ることになりました。その三日さえ無事に過せば、奥方の無実を言い解く道もひらけ、若君謙

之進の身も安泰あんたいになるでしょう。が、悪人のあせりようも一段猛烈をきわめて、その三日を無事に暮せるかどうか、はなはだ覚束おほつかない有様になっていることも事実でした。

「親分、そう聴いちゃ放っておけません、乗込んで行きましょう」

「馬鹿なことを言え、町方の岡っ引が、二千五百石のお旗本の屋敷へ乗込めるわけはない」

平次の悲しみはそこだったので。いかに証拠が山ほど揃っても、武家屋敷の堀へいの中までは、町方の手は届きません。

「口惜しいじゃありませんか、親分」

「だが、たった一つ」

平次は深々と考え込みました。

明日はいよいよ主人将監が帰るといふ日、銭形平次はとうとう青い御神籤の曲者——実は久野将監しやうげんの家来進藤勝之助を本所相生町あいおいの隠れ家に突きとめてしまいました。最初はさんざん白ばつくれましたが、ぐんぐん突っ込んで行く平次の問いに追い詰められて、

「それじゃ、どうしろというのだ。——拙者はいかにも進藤勝之助、仔細しさいあつて姿を変えたところで、町方役人に文句を言われる道理はあるまい」

意気な裕あわせの前をキチンと合せて進藤勝之助は四角に坐るのです。二十二三のまだ若い苦味走った良い男、腕にも分別にも申分のないのが、侍の地が出ると、さすがに犯おかし難いところがあります。

「進藤さん、そう打ち明けて下さると何よりありがたい——。あつしの申すこ

とを聴いて下されば、あなたの親御——市太郎様を殺した相手も教えて上げましょう」

「父親を討つたのは、誰だ。まずそれから聴こうじゃないか」

「いえ、それは一番後で申し上げます。それより、親御様市太郎様は、奥方様の御味方ですか、それともお部屋様方ですか、あなたは御存じでしょうね」

「——」

勝之助の顔色はサツと変りました。

「私から申し上げますようか。——父上市太郎様もさいしよは奥方様の御味方

だったに相違ありません。が、フトしたことから悪人どもに悪い尻しりを押えられ、

後には次第次第にお部屋様方に味方するようになり、亡くなる頃は、動きの取れない悪人方になっておりました。——あなたがそれを、どんなに心苦しく思われたかもよく解っております」

勝之助はジツと膝に眼を落しました。この一年間、悪人方に転落して行く、心の弱い父の姿を見ることが、どんなに凄まじい苦痛だったでしょう。

「ところが、亡なくなった後に残る、父上市太郎様の汚名おめいは何んとなさいます」

「父の汚名？」

「悪人どもは悉ことごとく細工さいくをしてしまいました。明日江戸御帰府の殿様に御覧に入れるため、あなた様の父上市太郎様を奥方不義ふぎの相手に拵こさえ御親類方にまで披露の手筈てはずになっております」

「それは本当か」

勝之助の顔はもう一度変りました。

「父上市太郎様の懺悔状ざんげじょうを作り、山家斧三郎がそれを持っております。今夜はたぶん深田琴吾きんご、御部屋様などと顔を合せ、最後の手筈てはずを定めることでございます

ましよう」

「どうしてそれが解った」

「お菊の言葉や、父上市太郎様の最期の様子、奥方のお言葉の端々からそれ位のことは察しました。それに駒形のお屋敷には一昨夜から、三人の諜者ちようじゃを入れ、出入りの商人はことごとく調べ上げてしまいました」

平次の周到さは、たった二日一夜の間に、早くも事件の全貌ぜんぼうを掴んでしまったのでしよう。

「――」

「あっしの申すことが本当か嘘か、今晚お屋敷の内のどこかに、三人の悪人が相談しているところを突きとめ、その話の様子が少しでもわかれば、何も彼も分明になります。その上で、御隠殿裏の奥方様の御隠れ家にお出下されば、親御様の敵の名を申し上げます。――宜しゅうございますか、進藤様」

平次は念を押しました。この青年武士を用うるよりほかに、悪人どもの企みたくらを知る工夫はなかつたのでしよう。

「よし、しか確と引受けた、その代り」

勝之助は青白い顔を挙げます。屈辱くつじよくと義憤に、ワナワナと頬が顫えます。

「万一私の申すことが嘘うそでしたら、平次の首を差上げましょう——と申しても張合のないような私でございます。斯こうしましょう。私の見込が外れたら、今晚かぎり十手捕縄を返上し、この鬚節を切ってお詫びいたしましょう」

「よし、つが確と言葉を番えたぞ」

勝之助はフラフラと立ち上がりました。

この後のことは、長々と書くと際限さいげんありませんが、ざっと筋だけを通すと、その晩進藤勝之助は、深田琴吾、山家斧三郎の二人の悪者を取って押えて、御隠殿裏の奥方の隠れ家に飛込んで来たのでした。

「平次殿、——一言もない。まさに察しの通り、悪人どもは亡なき父一人に悪名を負わせ、明日は帰府の殿を欺あざむく企たくらみであった。あまりの事にその席に飛込んで、かくの通り。残念ながらお部屋様は取り逃したが」

「とうとうやりなすったか、進藤様。——御心中御察し申します。しかしこれより外に、御家安泰の道は無かつたでしょう。見事父上の過失を償つぐなわれました」
平次は挙げかけた手を膝に置いて、奥方の方を振り返るのです。

「ところで、父の敵だ。約束通り、教えて貰おうか、平次殿」
勝之助の膝は、きつと平次の方を向きます。

「申しましょう。——父上市太郎様の敵は、何を隠そう、父上御自身」

「何？ 何んと言う」

「父上市太郎様は、身を恥はじて自害じがいをなすつたのです。それを庇かばつたのは、ここに居られる奥方様と、お女中のお菊さん。万一自害と知れては、父上様の非

をあば発くことになりましょう。咄とつき嗟の間にお二人で相談して、刀を隠して格子戸を外し、曲者が外から入って父上を害めたことに取繕とりつくろったのです。それに間違いはないでしょうな」

「——」
奥方浪乃はうな垂れたまま涙を拭き、女中のお菊は眼をあげて、大きくうなずきました。

「よく判りました。親の敵を討とうとしたのは、この勝之助の浅墓さでございました。それでは、私はこのまま退転いたします。奥方様には、今夜のうちに駒形のお屋敷にお帰り遊ばし、明日は晴れて殿様の御入府をお迎え遊ばすよう」
勝之助は畳もろてに双手を落すのです。ハラハラと膝を洗うのは、若さと純情さに溢あふるる涙でした。

「ありがとう、勝之助、何もかもお前のお蔭。——折があったら帰っておくれ。」

——殿様へは、私からよく申します」

奥方は蒼白い顔を挙げました。激情に顫ふるえませんが、限りなく上品な美しさです。

「では、奥方様」

「お待ち、これは、せめても私の志」

奥方は手文庫から、持重もちおもりのする金包を出して、ひた泣く勝之助に押しやります。

後には貰い泣きのお菊と平次。——ガラツ八の八五郎も隣りの部屋で大きく鼻を啜すすっているのです。

×

×

翌る日は奥方浪乃、屋敷に帰って良人久野将監しやうげんを迎え、事件の顛末てんまつを、人を傷けない程度に報告しました。妾めかけのお新が、そのまま行方不知になったことは

言う迄もありません。

一件落着の後、ガラツ八の八五郎は、

「市太郎は本当に自害したんですか、親分」

割り切れない顔を平次にブチまけるのです。

「自害なものか、立派な下手人げしゅにんがあるのさ」

「へエー」

「奥方だよ」

「へッ」

ガラツ八はさすがに胆きもをつぶします。

「用人の進藤市太郎は、さいしょ悪人に引摺ひきずられたが、美しい奥方と一緒にい

るうち、本当に悪い望みを起して、奥方に無礼なことをしたのさ——、末期まつごの

苦しい息の下から、奥方の方を拝んだと聴いて俺は大方察おおかたさつしたよ。それにあの

格子戸は外から曲者があけて入ったんじゃないくて、内から無理に外したのだ。多分お菊の細工さいくだろう。刃物を隠したのもお菊かな。あの娘は恐ろしく伶俐れいれつだよ。——それに味噌摺みそすり用人でも何んでも武士たる者が、正面から曲者に咽喉のどを刺されるといふ間拔な法があるものか。——誰も曲者の顔を見たものが無いといふのも考えるとおかしなことだよ。——俺は最初からあの奥方が怪しいと思つていたんだが、素姓が判らないから手のつけようは無かつたんだ。お前に見張らせたのはそれが知りたかつたからだよ。あわてて奥方を縛ると飛んだことになるじゃないか」

平次はこう説明するのです。お菊と勝之助とのあいだは青と赤の御神籤を通して結ばれた。ほのかな親しみの始末については、いづれ勝之助が久野家に帰参の上、平次の橋渡しで何んとかなることでしよう。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十七年十一月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第七卷 河出書房 昭和三十一年八月五日初版

編集・発行
錢形俱樂部

第廿七吉



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>